

## 林華生君の思い出

小林英夫<sup>†</sup>

### In Memory of Dr Lim Hua Sing

Hideo Kobayashi

林華生君と私の付き合いは1970年代から始まるから、早稲田のアジア太平洋の教員仲間のなかでは比較的古いほうかもしれない。最初の出会いは、2人の共通の先生である法政大学経済学部教授の故古川哲先生の「海外投資論」〈確かこういう授業名だったと記憶する〉の授業で、であった。正確な理由は忘れたが、その授業は、上石神井にあった先生の自宅で開かれていた。たぶん、大学紛争の余韻がまだ残っていたからかもしれない。1ヵ月に2回ほど開かれていたと思う。先生のご自宅の2階の書斎兼客間が教室代わりに使われていた。日本人は私1人だけで、あとはシンガポールやマレーシアといった東南アジアからの留学生だった。5、6人も入れば満杯の小部屋で皆が車座で先生の講義を受けた。吉田松陰の松下村塾の昭和版などと洒落て言う人もいた。私は、先生が趣味の陶器の骨董品が置いてあるガラス箱の横に座を占めたが、林さんはいつもどういいうわけか先生の隣の特等席に鎮座していた。英語版のヒルファーデングやホブソンが主なテキストだったように思う。ドイツ語版の資本論も使っていたように思う。先生はドイツ留学から帰国したばかりか、これからドイツへ再留学する前かで、ドイツ関連の興味深い話が思い出として残っている。先生が宿舎とされたドイツの留学先は、4部屋でトイレと風呂を共通に使うアパートで、先生が風呂とかトイレを使おうとするとき、時折どこか別の部屋の女性が使っていて、困った。ある時先生が風呂を使おうとしたら女性がトイレを使っていて慌てて戸を閉めようとしたら、便座をスカートで覆っていたその女性は、構わないから使え、と合図されて、どうすればいいか迷った、などというつやっぱい話を覚えている。議論が白熱すると、先生は「ちょっと待て」といってはよくご自宅の庭に建てられた書庫に入り込んで文献を持ってこられた。先生の古いノートを見せていただいて、改めてどうノートをとればいいかを教わったものである。それは見開き1頁が絵のように系統図で整理されていた。それから、私もそれまでの行間を埋めていくやり方を変えて1頁をいっぱい使って絵を描く方法に変えたのである。とまれ、この授業は、英語交じりのもので、私がいい加減な英語をしゃべったとき、林さんが皮肉交じりにそれを修正したことが鮮明に記憶に刻み込まれている。そして、私が怒りの表情を顔に走らせたとき、それを平然と無視していた彼の横顔を思い出すのだ。つまり、二人の初対面は、双方ともあまり好ましいものではなかったようだ。

林君への印象が大きく変わり始めたのは、それからしばらく経って私が歴史研究から現状分析へ、

---

<sup>†</sup> 早稲田大学名誉教授 Professor Emeritus Waseda University

具体的には東南アジアの企業調査を開始し始めた1980年代の後半からである。今から30年以上前のことだ。シンガポールとマレーシアのFTZ〈自由貿易区〉調査をするとき手づるがなく、スケジュールが立てられなくて困り、古川先生に泣きついたところ林さんに連絡をつけてくれ、林さんが動いてあっという間にシンガポール、マレーシアの有名人と有名企業のアポイントメントが取れたのである（このときの研究成果は拙著『東南アジアの日系企業』経済評論社 1992年として上梓された）。これは非常に助かると同時に林さんを見直した次第である。彼は、古川さんからの依頼ということで、彼の人脈をフル活用したのだと思う。シンガポールの商工会議所のトップや政府の役人、マレーシア企業のトップや官僚など、紹介された面々は私の希望に十分沿う人たちだった。このとき私はあらためて彼の人脈造りの一端を垣間見ることになる。彼は私のために動いてくれたこともさることながら、同時に古川先生という彼の日本での人脈の中核にいる人の依頼であるがゆえに全力を挙げたのだと思う。個人というよりは個から構成されるネットワークを彼はいつも重視して行動していたように思う。このネットワークをより大きく、より太くそしてより強靱にする、そのために注意深く手を打つという彼の生き方に、私は華人の処世術のようなものを垣間見たのである。

それから何年経ったか忘れたが、私と林君は早稲田大学アジア太平洋研究科で同僚となった。しかも後藤乾一先生を継いで私がアジア太平洋研究科の委員長となったとき、投票で次点だった林君にセンターの副所長をお願いしたのである。親しく付き合うなかで、いくつか不思議なことに気がついた。必要な用件を済ます時には、必ず自室に私を呼ぶのである。私に用事があるって私の部屋に来るときもノックをして私を呼び出し、部屋のなかに入ることはついぞなかった。彼の部屋の間取りも同じで、常に彼は窓を背にして相手と対した。中学時代に読んだ推理小説的一幕を連想させる舞台装置だった。また、彼と来客席の間にはテーブルが置かれ、そこには越えられない物理的・心理的壁が設けられていた。防御を固めた中世の城の主といった感がぬぐえなかった。彼と一緒に中国は天津の南開大学を訪問し、学術交流会を開いた時の彼の別人のような姿と中国語での冗談や中国人女子学生と交流するリラックスした姿とは、およそ似て非なる研究室模様に少なからず驚いた、というのが本音のところだった。グローバリゼーションとか国際交流とか異文化交流とか言うが、生易しいものではないのは日本人もアジア人も同じなのだということを痛感した次第である。

時流れ林君が亡くなる数か月前だが、部屋の電気を消して帰宅する彼の後姿にこれまでにない疲労感の漂いを感じて、声をかけたことがある。彼は、例のぼそぼそ声で、「すこし疲れている」と力なくつぶやいたのが、彼と交わした最後の言葉だった。

春休みを終える時、私は彼の訃報を聞いた。聞いた時にはもう彼は日本を離れていたから最後の別れに列することはできなかった。……かようなわけで君との思い出は多いし、それを綴ればきりがない。が、とまれ林君、疲れただろう。休息が第一だ。ひとまずは陽光豊かな君の故郷マレーシアに戻り、母なる大地に抱かれ安らかに眠れ。